議事概要

令和７年度　第２回　新潟市若者支援事業運営協議会

日　時：　令和８年２月 16 日（月）　午後１時 30 分～午後３時 30 分
場　所：　新潟市役所　ふるまち庁舎（古町ルフル）４階　403 会議室
出席者：　新潟市若者支援事業運営協議会委員
丸田委員長、伊藤副委員長、青山委員、片桐委員、小林委員、松田委員、
横尾委員、山本委員
事務局　生涯学習推進課長ほか８名
傍聴者：　なし

１　開会

２　生涯学習推進課長あいさつ

３　議事
（１）令和７年度の実施事業概要について

（事務局）　案件概要説明

（片桐委員）
学習室について、クロスパルでは利用が多くてあふれている時がある。活用することはできないか。学生が来たりすることが可能な場所なので開放することは難しいか。

（事務局）
４階にある学習室は、カードを作った人が利用できる。ほとんどの学生は５階のフリースペースで学習している。いつも行っている学習場所が休みの時のために、カードを作る若者はたくさんいるが利用者は少ないというのが現状である。

（伊藤副委員長）
実務代表者会議のオールの報告で、相談が増えて待っていただいている状態とある。以前よりは増えているということでよいか。相談を受けているのは、何人でどれぐらいのキャパシティか。明鏡高校のフリー相談事業で、ほとんどの方が相談を継続中となっている。この相談の機会をどのように高校生が使い、また相談継続に至っているのか。

（事務局）
高校生の相談が増えていて待っていただいている状態である。相談員の確保が難しく、４人の相談員がいるべきところを２人の相談員と公認心理師の３人で回していた時期があり、電話で申し込んでいただいても１カ月後となるような状態が続いた。
現在、公認心理師が全てインテークをして相談員に振り分けるようにした結果、待っていただかなくてもよい状態になっている。
フリー相談は、明鏡高校の担当の先生に申し込むという形である。継続中というのは、スクールカウンセラーに相談をしてる人もいるがフリー相談を継続という方もいる。

（丸田委員長）
そこでの重複はあり得るのか。スクールカウンセラーの相談を継続してる一方で、この事業のフリー相談を受けるという状況はあるということか。

（事務局）
そういう方もいる。フリー相談で母親が相談し、スクールカウンセラーには本人が相談をするというようなケースもある。

（伊藤副委員長）
つなぎ先という枠の中に入っていて、その要素がたくさんあるので中身が見えにくい。まとめ方を少し考えると何が起こっているのか見やすい。また、３つの機関が訪れて相談をする機会はとても貴重な機会である。役割分担がどうなっているのかということが見えにくいので、そのあたりを整理するといいのではないかと思ったのでお願いしたい。

（事務局）
相談に出向く機関は３機関だが、教育相談センターとひきこもり相談センターの機関も入って定例会を行っている。

（小林委員）
本当に明鏡高校の応援ネットで助けていただいて、このフリー相談が非常にありがたい。スクールカウンセラーの相談支援は週１回ある。そこに行く子たちはどちらかと言うと自分で行って相談ができるような、まだ元気があり校内で支えられる子、担任と保健の先生、スクールカウンセラーで何とかクリアしながら学校生活を頑張っていけるところのレベルの子である。担任ではどうしようもなくなってしまった子たちを福祉につなげたい時に、どこからスタートしようかとなる。最初から保護者に言ってすぐに動けるわけではないので、まずはこのフリー相談から入ってみたらどうですかとなる。外とのつなぐ入り口というか、そこをチャンスにして、どちらかというと担任の先生が困っていて、ここにつないで何とかいいアドバイスをもらえないかという形である。学校での相談支援をつくるのがカウンセラーで、外へつなぐところ

がフリー相談になっている。
　また、このフリー相談に行く子たちは人と関われなくてアルバイトがうまくできない。アルバイトをしたいが、どうすればいいのか分からない時にアドバイスをもらい、ジョブトレからスタートということになる。社会につなぐ最初の入り口になっているというところが非常に大きいところである。
　また保護者によっては、医療機関に行くことをとても嫌がる方がいる。どう見ても私たちの見立てで発達に特性があり、この子は学校内だけでは限界があると思った時に、保護者にフリー相談をしてみませんかと伝える。フリー相談という言葉は敷居が低く、話がしやすいというところがあるので、外とつながる大事な絆みたいな感じを私たちはもっている。ぜひ、これからも私たちにとって大切なので、継続してもらえればと思っている。

（丸田委員長）
　ありがとうございました。若者が抱えてるニーズと、オールの相談機能で提供できるサービスなどその辺は評価者としてコメントはあるか。ニーズはあるが、体制上で対応しきれないのか。それとも、今の現体制であっても若者が相談ニーズと、工夫をすれば何とかやっていけるのか。大事なところかと思うのでコメントがあれば。

（事務局）
　特性のこじれを抱えた方の相談が多くなっている。二次障害であるとか、自分が特性をもっていることが分からないとか、いろいろな特性のこじれのケースがある。家族関係の虐待もあるが、今のオールの相談体制で頑張ってはいるがとても大変に思うことが実際に多い。

（丸田委員長）
　今日はオールの相談機能をどうしようという話ではないので、事業の報告をいただいたが、関連して発言があれば。

（青山委員）
　電話をして患者が来た時は、こういう場所があると電話番号を書いてあげて、電話をしてどうかというふうになる。しかし、そのような電話もなくて突然行くような人がいた時に、どのような受け入れになっているのか。行っても受付があるわけでもない。初めて来たけど誰も声をかけてくれないとか、何をしてる場所か分からないで終わってしまったら相談につながらないのではないか。

（事務局）
　必ず居場所にはユースアドバイザーがおり、私たちも 30 分に１回ぐらいは４階、５階を見回っており、気になるという子にはお声がけする。直接、話を聞きたいという子も実際にいる。
　相談に来る若者も、居場所に来る若者も以前とはニーズが変わってきており、何らかの特性、

何らかの疾病を抱えた方がとても多い。特に多いのは、中学で不登校を経験し、取りあえず通信制に入ったが人と関わることが苦手である 10 代の若者、大学は出たけれど就職ができないという若者で難しい方々がたくさんいる。そうすると、居場所に出る数も減り、事業に参加する人も少なくなる。今までの事業の中に当てはまるような相談者、支援者は少なくなってきている。ユースアドバイザーにしても、そのような特性のある方が多いため、養成講座などの研修だけでは若者と関わるのが難しい状態である。ユースアドバイザーも障がいや疾病などについて知識がないと、対応できないような状況になってきている。

（伊藤委員）
今後のことで、相談項目件数の「その他」の内訳のところを見ると保護者の心配が書いてある。そして、その後の次の年齢層別を見た時には 10 代が多いということで、どこに保護者の内覧者の年齢が入っているのか気になった。保護者が心配して来るということが、少し前まではあんまりなかったが入り口として保護者が相談に来るというのはとてもいいことだと思う。それが統計として、きちんと見える形にしておくと今後の参考になる。入り口として保護者が来て、それから本人につながるというようなルートはよくあると思うので統計を取っていただけるといいと思う。

（丸田委員長）
全体の半分以上が「その他」である。今のご指摘のところは、いったん受け止めていただいて、よろしくお願いしたい。

（２） 今後の取組についての意見交換及び情報共有について

（事務局） 案件概要説明

（丸田委員長）
ただいまの調査結果を受け、どのあたりに焦点を当てて分析をしていくといいのか、どのあたりを課題として取り上げていけばいいのか、また、これからの施策の方向性についてご意見いただきたい。

（小林委員）
この調査の結果は、非常に貴重な財産になる。やはりアセスメントが大事なのですごくありがたい。
この中で気になっているのは、「今の自分が好きだと思いますか」という自己肯定感のところで新潟市全部で高い数値になっている。時代の変化でこのようになっているのか分析をしたい。また、昔は地域でだいぶ差があったが、住んでる場所で違いはないのか気になった。やはり自分が好きで、自分はためになっていると思えば、少しくらい苦しいことがあったとしても

頑張れると思うので、いろいろな人の関わりがあり、ここまでいい感じになっているのかなと少し安心する材料というかうれしい評価であった。

（片桐委員）

中身についてはないが、年齢層が偏っているのは中学生までが保護者というか、学校の先生の管理する中で保護されている部分があるが、高校生、大学生にいたっては 39 歳までにどのように情報を集めるのかが課題になる。大学生以上になってしまうと、親の手から離れていったところの声をどのように協力を得たとか、それ以外のところはどのように集めたとか、そこの工夫が広がるといいと思った。

（伊藤副委員長）

全国的に肯定的な自己評価が多いが、「そう思わない」とまで書く方が３割いるというのは結構だなと思った。相談のところに関して、「相談したくないと思う理由について」をオールが果たせる役割として分析をしていきたい。

オールの認知度について、学校の学齢期の頃に関わるセンターは認知度が高くなる。どのような機関の認知度が高く、どうしてオールは低いのかということも分析ができるとよい。

オールに関しての利用者アンケートから、利用している方には肯定的な思いをもっていただいていてとてもよかった。その中で、やはり心理的、心の問題の相談というニーズが高いと思った。どのようにして専門性を上げた方を増やしていくのか、専門的な相談が必要な人とそうでない人をどのように見分け、どのように相談を組み立てていくかというようなことが検討する材料となる。

自立支援事業の活動について、経験をすることが大事であると思っていたが、意外にストレスマネジメントや対人関係スキルというところが高い。グループ活動をした時に、活動するだけでなく、どのように振り返って成長につなげていくのかということも考えてプログラムをしている。そのようなことを企画できる専門性をもった方がその場面にいればとても役に立つし、若者の気持ちに応えられるのではないかと思った。

（青山委員）

一般的な若者の意識で、中学生の年代だと受験を経る前で希望にあふれているのだろうけど、高校選択という場面を経験するとやはり現実視をしなければいけない。現実でどうやって生きていくのだろうとなると、将来に対する期待感は減ってしまうことは当然である。義務教育の中で自分が合わない部分でも、すごく無理をして合わせなければならない生活をしてきた子たちが高校を選択することで、自分らしく、自分の活躍できるものを探してもらいたい。それが高校選択の大事なことであると思うので、教育に携わるものから学校を選択する時に、いろいろな資料が中学校の段階できちんと提示し、その子らしく成長していけるようなものを出してあげることによりギャップを減らすことにつながってくれたらいいと思う。

このアンケートから、オールにつながるルートというのが見えるわけではないが、どのよう

な子がつながってくるのだろうというのが分かったらありがたい。また、オールの期待していること、未来に対するキャリア、学業と経済、生活の支援というのが上位にあがってくる。臨床をしていると、やはり経済力というものがすごく大事で、親の経済力によって希望は随分と変わってしまう。経済的なところを見るためには、このようなアンケートの中で、その子たちの今の経済状況であるというのがベースに入ってこないと分からない問題であると思う。

（松田委員）

こころの健康センターは相談機関なので、やはりいろいろな気になる所がある。人づきあいが苦手であるとか、人との関りで困難を抱えている子たちが多いというのがここからも見えてきてるとすごく感じた。

ひきこもりになった人たちにインタビューをした調査の中で、学校時代から相談するスクールカウンセラーや、そのような機会は幾つもあったがそれを上手に生かせなかった人たちの結果が出たところがあった。きちんと相談する場所を設定していても、自分から相談することがすごく難しいのだろうということ。人づきあいが苦手で、本当は相談したいのだが越えられないということもある。そこをどうするのか、どうやって改善の道をつくっていくのかというのは難しい。しかし、オールというところがあると周知し、最初の一歩はここで聞いてもらうことができると、ここの役割みたいなものもすごく出てくると思った。

難しいが、まだ認知されていないというか、まだ分からないという人がこれだけいるので若者支援のためにこういうところがあるということをもっと打ち出せたらいいと思った。

（丸田委員長）

背景には、いろいろな困難に直面したり、その困難で困っていると感じていたりしている若者が一定のボリュームがある。一定のボリュームとオールの果たしている役割のところのズレとは言わないが、やはりオールの一部のサービス提供にとどまっている現状というのは間違いなくある。

（横尾委員）

全体のアンケートで気になったのは、「社会の役に立つことをしたい」と思っている若者が90％もいること。自己有用感がすごく低かったから、やはり誰かとつながりながら認めてもらいたいというような思いが強いと思った時に、学校と家庭以外の地域として何ができるのかと考えた。

地域の皆さんと話をしている中で、いろいろな発達障がいであるとか、生きづらさを抱えた若者であるとか、そのような方を理解したいという強い思いをもっている地域住民の方が多くいる。地域の交流や震災時など、やはり顔がつながっていなければ何にもできないし、助けることもできない。自分たちがしっかりと理解した上で、地域の様々な交流の事業があるのだが、そういったところに招き入れられるような受け入れ態勢を自分たちも取っていきたいという意見がある。どう繋げられるのかを考えていたところ、地域を居場所としているという方がこ

んなにいるのだなと思った。
「相談できる人」とか「困った時に助けてくれる人」がどこにもいないという人が一定数いる。ここをどのようにしていったらいいのかと思った。
オールをさらに利用しやすくするために改善してほしい点で、「スタッフ・専門家のサポート体制の強化」というのが一定数ある。本人も困っているが、どうしていいのか分からないというＳＯＳをどのように繋げていくのか、ここにオールの人材を強化していくのか、あるいはつながりを強化していくのかという体制づくりが求められていると感じた。

（山本委員）
私も居場所のことを考えていて、高校生以上になると行政でやれるような居場所というのは極端に少なくなっている。居場所、交流の場が足りないというところで気軽に立ち寄れる場所が求められているところに需要、ニーズがあるということがよく分かった。これが支援ではなく、気軽に立ち寄れるというところがこの意見の中の言いたいところであると思うし、この方々が支援は必要ないけれども居場所が必要であるということなのかが分かると、また我々の支援まではいかないけれども、支援の一歩手前で問題解決につながるみたいな流れにできると感じた。

（丸田委員長）
ここまでを受けて事務局からコメントはあるか。各委員の方々からいただいた意見に対するコメントがあれば伺いたい。その後で、この結果をどのように取り扱っていくのかというあたりについても、補足的に説明いただけるとありがたい。

（事務局）
自己肯定感は、全国と比較しても新潟市の子ども・若者が非常に高いということも驚いたところである。時代の変化によってそうなっているのか、居住地によって違いがあるのか分析したい。また、若者を支援するための手立てや強化していくべきところをデータ分析から方向づけていきたい。

（丸田委員長）
オールの分析と考察と今後の方向性については整えやすい。この 15 歳以上 30～40 歳くらいまでを視野に入れた若者に対する今回の意識調査から見えてきた課題をどう取り上げて、どう施策に織り込んでいくのかというのは、かなり難しい議論になりそうである。その辺、意見があったらお願いしたい。特に青山委員から経済状態との関係性みたいなものはとても大事ではないかというご指摘もあった。山本委員、こども計画を立てる時に、経済状況の把握というのは、15 歳以上の人たちの世帯の経済状況の把握はしてあるのか。今回の若者の意識調査も少しクロスさせた時に、何か課題が見えてくるか。

（山本委員）
こども計画は中学生までになる。保護者も含めるが、その中学生の部分だけが重なると思うが、高校生以上のデータはない。

（青山委員）
虐待により児童自立支援施設で育っている子たちが高校生までいる。その次はどうするのかといった時に、やはり経済力がないので希望がなくなってしまい大きく展開できなくなってしまう。そこがどうにか政策につながっていけるところがあってほしい。

（丸田委員長）
今の意見、論点には間違いなくなると思うが、それをどのように取り上げるかということになると、いろいろな議論が必要かと思う。

（事務局）
この結果を見て圧倒的な認知不足を感じる。支援機関としての認識不足が顕著に出たという時に、困った時の若者の選択肢に入っていない可能性がある。アンケート結果から、相談行動そのものへの抵抗感や障壁のようなものも大きく見られる。そういったところを解消するような手立てが必要なのではないかと感じた。
オールの利用者調査から見えてきた課題としては、利用者の視点から見ても圧倒的に情報が不足している。しっかりと必要な人に必要な情報として届けるというところが最優先で取り組まなければいけないのではないか。
オールという相談機能がある場所に立地している住民と、そうではなく少し遠いところにある方のニーズが実際にクロスで見た時に、どのような違いが出てきているのか。オールに行かなければならないのではなく、もっと近くに居場所があった方がいいというニーズも出ているのかもしれない。今後、分析を進める上でしっかりと検証していきたい。

（山口課長）
オールのあり方について、整理するきっかけとしている。私どもオールは社会的自立を目標に、夢や将来の期待をもってる子たちを支援する。いわゆる青少年団体の部屋からオールに至った経緯があり、当初は福祉や精神、グレーな部分なところの想定はしておらず、仲間づくりであるとか、人づきあいが苦手なところを支援していくというところからスタートしている。そういう意味では、フリースペースが当初からあったり、事業も人との経験や付き合いからスタートしたりして、何とかそこで自立していくところを一つの分野としてやってきた。現実問題として、複雑化、多様化する様々な問題もうちではありませんというわけにもいかない。ここに電話をくれる、もしくはここに来てくれる子たちに、何か次のステップに進みたいというところをしっかりと受け止める。58 団体、運営協議会のネットワークをしっかりと広げてつないでいきたいという思いである。

このアンケートを取る前には、全体会のあり方は名刺交換だけではなく意見交換をしたり、一覧を作成したりと、今、自分がここにいるからここに相談できるのではないかという子たち、そこのネットワークの強化について取り組みをしたところである。

今回の方向性、あり方のアンケートについては、当初、予算もないことであり、4,000 幾つという数字が集まるという想定がなかったため、このアンケート結果を公表するということは予定になく、このアンケート結果を受けて方向性を検討する材料にしていく。この公表することの信頼性も含め、数が集まったので方向はいいかと思うが、まだ公開というところまで頭になかったことが事実であり、これを材料に次のステップに進んでいきたいと考えている。次の会議には、クロス集計も必要であり、場合によっては区の見方も必要であり、経済性と悩みの関係もクロスするという様々なご意見をいただいたと思っているので、今後また検討していきたい。

（丸田委員長）

課長から説明をいただき、かなりすっきりとしたがいかがか。

（伊藤委員）

広報のことを考えると、オールに来ている人がどのようなことをしてるのかということをしっかりと把握ができた。そういうところについて、一枚ものでもいいので「こんなことで来ている人がいます」みたいな広報があってもいいのかなと思う。

（事務局）

オールのチラシそのものは中学３年を卒業する時に全部配って、一枚ずつ紙資料として配っている。私たちもやってると思っていたが、オールではこんなことをやっているとか、こんな事業もやっているというところまではない。直感的にアンケートの結果を見て周知についてはしっかりしていかないといけないと感じている。

（青山委員）

中学３年だと、まだそのような世界に入っていない。高校１年になったところで夢いっぱいで頑張っているのであればよいが、もし何か困ったらという段階でちょっと手引きではないが案内があるといいと思う。

（事務局）

その辺も含めて検討していく。

（伊藤副委員長）

居場所はすごく大事であるが、駅南の問題もいろいろとあったが子どもたちが行きたがるところがあると思う。どのようなところにたまっているのか。また、どのような実態であるのか

を把握し、そこにオールの情報があったり、自立支援活動をすることができるのではないか。出張した方が、居場所事業とか活動に関しては意味をもつのではないか。

（丸田委員長）
それはどこで議論すればよいか。地域をベースに。

（伊藤副委員長）
放課後、部活動も微妙になってきいて、暇な子が増えてしまっていると思う。それでどこに行っているのかということを調べたものがない気がする。

（横尾委員）
地域だと、どこに子どもたちが集まるのかが大体分かっており、地域の方が見守っている。そういった出張というのであれば、ぜひ、社協とコミ協と一緒にやらせてもらえればありがたい。来年、地域福祉活動計画を立てるところで若者をどのようにして入れようかという話をしている。今のような話であるとか、このデータもすごくいいと思う。役に立ちたい若者がこんなにいるので、地域はどのように若者を受け入れ、役割をもってその地域の構成員になってもらえるかについて一緒に考えられると思っていて、各区と社協とでこれから話し合うところである。

（丸田委員長）
そこは居場所づくりの所管である山本委員のコメントをいただきたい。その時に小さな子どもたちだけではなく、中学生、高校生、さらには若者まで視野に入れた居場所づくりの施策が、今後どんなふうに進みそうなのかご紹介いただければ。

（山本委員）
今、このアンケートの中でいただいた時に、どこが居場所になっているかというとやはり家、学校、職場というのがほぼ大半というのがアンケートから分かる。今おっしゃっていただいたとおり、地域の方がもっている情報というのは、正直、まだこども政策課として全然吸い上げられてないので各地域ごとの実態を収集していきたいなと感じた。

（横尾委員）
公民館だけじゃなく、コミ協の居場所とかでぽつぽつ集まってたりしている。

（丸田委員長）
今回はあくまでもオールの今後のあり方を目的にした調査結果であるので、この調査結果をもって新潟市全体の若者支援施策をどう整えていくかということは全くイコールではないということが今日分かった。では、次の説明をいただきたい。

（事務局）　案件概要説明

（丸田委員長）
この場での意見集約になるか。それとも意見等があれば事務局の方へお声がけをする形でいいか。

（事務局）
ご意見などをメール等でいただいて、それを参考に修正・追加等を検討していきたい。

（丸田委員長）
使い方としてはガイドブックとセットになるため、完成すれば各関係機関に配布ということになるがそれは令和８年度になるか。

（事務局）
令和８年度である。

（伊藤副委員長）
外出困難に対応するところがたくさんあるのだが、このレベルというのは訪問支援ができるところと考えてよいか。

（事務局）
まだ調整中で確認は取れてない。

（伊藤副委員長）
そのような人がピンポイントにどこに相談したらいいのかと感じるので、どこに特化しているところなのか見えるとよい。例えば体験活動が集団活動に特化しているところなのか、特定の場であるとか、特定の若者とのコミュニケーションが可能というのであれば、少し個別支援になってくる。外出困難であれば、訪問支援という話になるだろうというところ。たくさんのものが全部横に長いので、どこに特化したところなのか見えるとうれしいなと思った。色が濃いところがあるとか、そのようなことはできるか。

（丸田委員長）
これは今後の作業の中で、各関係機関にこのような概要図の説明でいいのかどうかということで、今、グラデーションも含めてどこが重点なのか、どの辺が重点的な相談機能なのかということも、何か絵で示すようなことも含めて、各関係機関に紹介をかけるようなプロセスというのは用意してあったほうがよい。各機関から、この概要図の中で、自分たちの相談機能なり、サービス機能をどのように表現するか。

（伊藤副委員）
　確認した方がよい。外出困難まで扱っているというのは、電話相談があるという意味であるのか、直接行ってくれるところであるのか、いろいろとあるのかなと思った。

（丸田委員長）
　では、今ほどの意見のように代表されるような、各委員からのご意見なりがあったら、事務局の方に年度内にお願いします。

（３）その他
　（事務局）　　次回についての説明等

４　閉会

【配布資料】
・令和７年度　第２回新潟市若者支援事業運営協議会　次第
・令和７年度　第２回新潟市若者支援事業運営協議会　資料